

IC Vision 委員会

もう一度、原点(本質)に戻って
我々の存在意義を見つめよう

2016/12/23

第2回 スカイプ会議より

1-1.ビジョン委員会の話し合いで考えた意見(自由回答)

ビジョンの方向性の行方が重要。
理事の定数も再検討！
財務基盤も再構築が必要！
大きな方向を決める

事業を進めるマンパワー不足！
変化に合わせた組織変更がない！
新しい組織が活力を産んでいく！
昔は楽しい雰囲気があった

本質的な課題である！
組織なき組織運営の難しさ！
ミッション、ネームの検討が重要

会議は小手先のテクニックでなく
本質論を深く議論することが重要
新しい価値コンセプトの構築

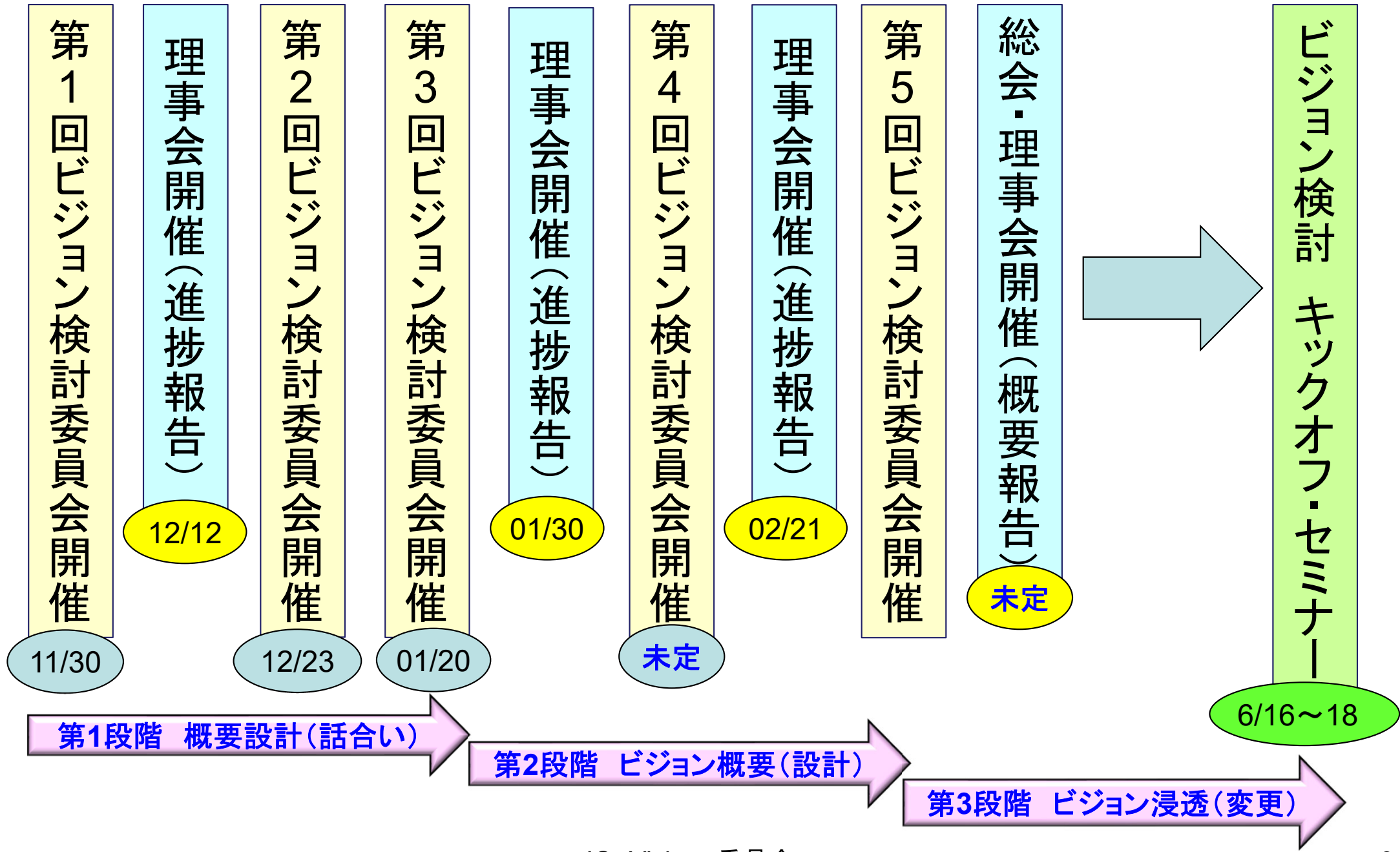
本当に必要かを問うことが必要！
IC(MRA)精神のシェア重要！
個人・法人会員へのリターン

まだ期間が短く、MRAやICの
意義が分からない！
楽しく、明るい事務所が良い！
難しいことを簡潔に報告する

持続可能なことは次代に見合う！
何に向かっていくのか！
※楽しく積極的な話し合い！

組織としての事業に追われている！
事業より会員個人との繋がり(ケア)
面白くない、金がないことの解決へ

1-2. ゴール(成果物)までのロードマップ



1-3. ゴール(成果物)のイメージの例

会員のニーズ、利害関係者のニーズを「ビジョン委員会メンバー」が記載する

↓

これを『テキスト・マイニング』して
想い(イメージ)を形式知に変換する

**多様な組織体
と関係する**
ネットワーク(リンクする)

**楽しい会話と
有意義な対話**
(社会貢献できる)

**国際社会で活躍
自律的な行動
変革リーダー**

2-1.ICのホームページより(原点)

■当協会の理念

Mission —ICの使命—

A Better World Through You and Me

より良い社会は、一人ひとりの在り方から

Vision —ICの目指す姿—

The Heart of Transformation 自らの心を涵養し信頼の絆をつむぐ

Value —ICの行動指針—

Absolute Moral Standards of **Honesty, Purity, Unselfishness, and Love.**

正直、純潔、無私、愛、の絶対道徳標準

※フランク・ブックマン博士の言葉より抜粋

IC(Initiatives of Change) は、

私たち一人ひとりが**(良)心の声を聴き、良い方向に変わり、家庭・職場・学校・地域社会・国、ひいては民族や国と国の間にも良い変化をもたらそう**という実践的な活動です。

世界60カ国以上で活動している**国連認定の国際NGO**です。

2-2.ICのホームページより(原点)

IC(アイ・シー)とは、
Initiatives of Change(イニシアティブズ・オブ・チェンジ)の略称
であり、1938年に**Moral-Re-Armament(MRA)**としてロンドンに
発足した団体です。

発足以来、この団体は、

「**あなたが変えたいと思う人**や**あなたが変えたいと思う国**に直面した時、
まずあなたがなすべきことは、**あなた自身を変える**ことです。

そうすれば**人も、国も変えることができる**のです。」

という考え方をずっと提唱してきました。

宗教、人種、民族等の違いを超えて、

世界中で信頼の架け橋を作ってきました。

現在、国連の認定を受けたNGOとして

世界60ヶ国以上で活動しています。

2-3.ICのホームページより(原点)

MRA(現IC)は、第二次大戦の直後、GHQからの特別な許可を得て、**ドイツ各界の代表**をスイス・コーの国際会議に招き、そこで長年の仇敵であった**フランス人との和解**を進めたのです。当時、フランスの社会党の国会議員であったマダム・イレーヌ・ローは、ナチスへのレジスタンス運動に参加していた時、目の前で息子がゲシュタポから拷問を受けたためドイツ人を非常に憎んでいました。

彼女が招かれてこのMRA会議場に来て見ると、ドイツ人たちが大勢いたのです。直ぐ、荷物をまとめて発とうとした時、ブックマン博士に「**ドイツ抜きにヨーロッパの再建が出来ると思いますか?**」と問われました。



彼女は部屋に戻って3日3晩悩み、考え抜きました。

ドイツ人との食事に臨んだ彼女はそこで**ドイツに対してもっていた憎しみを謝罪**すると共に、大勢のドイツ人が緊張して見守る中、**大会議場の演壇から謝罪**をしたのです。ドイツの代表団は感激し、それをきっかけに**両国の間に和解の橋が架けられて**いきました。

2-4.ICのホームページより(原点)

1955年には、フィリピンのマグサイサイ大統領が、日本やアジアのMRAの代表を**戦争の傷跡の生々しいマニラ**に迎えました。

星嶋二郎(にろう)議員は、ここで**日本の過去の過ちを謝罪**し、このことによって、四年間も困難な交渉が続いていた賠償協定の道が開かれました。

また、1957年の**フィリピンのバギオで行われたMRA会議**でも、日本からの代表がアジアの人々に心からの謝罪を行いました。

このことにより、最初は**日本の代表とは口も聞こうとしなかったという韓国からの代表とも和解**ができ、日韓条約締結の足がかりともなっていたのです。

他にもアフリカの**モロッコの無血独立**や、ジンバブエでの**白人政権から黒人政権への平和的な移行**、そして現在も、新たに独立した**南スーダン**等々、世界各国で多くの和解のための活動がなされています。



2-5.日本の国際社会への復帰とアジア太平洋諸国との和解

MRA(IC)は、1950年、MRAの人々の浄財により、**経済人、労働組合指導者、知事、広島・長崎の市長、教育者、政治家など72名**の日本代表団をスイスのMRA世界大会に招きました。

敗戦で自信を失っていた日本人が暖かく世界の人々に受け入れられ、**独仏の和解**や**労使協調**など**各国の人々の多くの和解の体験**を聞く機会を得たことが、これら代表団に大きな影響を与えました。

国会議員のグループは、帰路立ち寄ったアメリカ議会において、栗山長次郎議員が、「一世紀にわたる両国間の友好関係を日本が破ってしまったことは遺憾である。我々が犯したかような失敗にも拘らず、**寛大なアメリカは日本を許し、日本の存続を認めるだけにとどまらず、復興の助けを担ってくれた**」と述べ謝罪しました。

この謝罪はアメリカ議会のみならず、週刊誌「サタデー・イブニング・ポスト」でも「**自国の失敗を認めるというこの行為は新鮮な衝撃をあたえてくれた**」、「**私たちアメリカ人も過去を省みて、『あの時は全く失敗だった』**といわなければならない点があるだろう」と論じ、大きな評価を受けました。

